

第1回全国高等学校情報教育研究大会の報告と大会のサイン計画 ～大会のキーワード「情報デザイン」に絡めて～

神奈川県立横浜清陵総合高等学校教諭 五十嵐 誠
総合学科情報日誌：<http://arashi50.cocolog-nifty.com/blog/>

1. はじめに

平成20年8月22日、初の全国高等学校情報教育研究大会が行なわれました。天候にもめぐまれ、全国25都道府県より300名を超える情報教育関係者が集いました。発表内容は、コンピュータ操作的なものから脱却して、教科の目標とするICT教育を推進するものが増えています。終了後の懇親会も100名を超える参加者があり、和やかな雰囲気の中で交流を深めることができました。まさしく大会のテーマ「Next Stage —新たに広がるネットワークの構築—」を実現できた一日でした。大会の様子と各発表内容はWebに公開していますので、残念ながら参加できなかった方々には、ぜひご覧いただきたいと思えます。

私は大会実行委員の一員として、大会のサイン計画を担当しました。また、神奈川県高等学校教科研究会情報部会では「情報デザイン」の研究を推進しています。そこで、大会の報告に絡めて、大会のサイン計画と情報デザイン教育について紹介させていただきます。

2. 全国大会の実現まで

平成17年に東京大会、平成18年に埼玉大会、平成19年に神奈川大会と3回の「関東大会」が実施されてきました。同時に、各種のセミナー・研究会・学会参加といった直接の交流や、ブログやMLのオンラインの交流により、全国の情報科教員の繋がりが進み、全国大会の機運も高まってきました。一方で、各都道府県によって情報科教員の活動組織の形態が異なるので、いきなり組織として束ねるのは困難なことから、まずは関東組織のメンバーが中心となって準備委員会を立ち上

げ、実行委員会形式で第1回全国大会の実現を目指すことになりました。

第1回の全国大会は東京で実施することになり、武蔵工業大学附属中学・高校の神藤健朗先生のご尽力で、武蔵工業大学（世田谷キャンパス）が会場に選ばれました。武山洋二郎実行委員長（東京都高等学校情報教育研究会会長・都立松原高校校長）と石川裕二実行副委員長（神奈川県高等学校教科研究会情報部会会長・県立横浜清陵総合高校校長）の指導の下で、平成20年1月から実行委員会の会合を開き、事務局を小原格先生（都立町田高校）と神藤健朗先生にお願いするとともに、大会の申込受付、協賛企業の募集と連絡、サイン計画、記録、懇親会など各担当を決めて準備を進めてきました。連絡にはMLとWikiを使っていたので、遠方の先生からも積極的にご意見をいただくことができ、これが励みになりました。

5月と7月に各都道府県の教育委員会あてに案内状を送付させていただきました。全国の関係者レベルまでのアナウンスが不足していたことは次回の大会運営の課題となります。

大会のリーフレット、Webサイト、大会ロゴ、構内案内、名札などのサイン計画については、武蔵工業大学環境情報学部（横浜キャンパス）の小池星多准教授と情報デザイン研究室（以下、小池ゼミ）の学生が全面的に協力してくださいました。

3年次生のゼミの配置が決まったところで、会場となる武蔵工業大学世田谷キャンパスにて、神藤先生と私より趣旨の説明をさせていただきました。

まず6月は、大会のテーマを表現するロゴの制作に費やしました。小池先生の指導の下、学生が

一人10個の案をデザインし、KJ法的にグルーピングして候補を絞っていきます。この過程で学生間のイメージの共有ができていく様子は、グループワーク指導の手法として勉強となりました。3つの候補に絞られたところでプレゼンを行い、実行委員事務局と学生間のキャッチボールを繰り返して完成に至りました。

リーフレットとサイン構造物の作成に入ると、学生は夏休み返上で作業をし、何度も徹夜をしたようです。応援のために訪問すると、進捗状況と見通しを説明してくれるのですが、必ずプロトタイプモデルを作成していることに感動しました。



大会の前日は会場の準備にとりかかります。受付の設定、プロジェクタやマイクなどの動作確認、発表者から送られてきた資料の開封、配布資料の綴じ込みなど、前泊でいらした沖縄県立総合教育センターの川満裕史氏にもお手伝いいただきました。一方、小池ゼミの学生は、横浜キャンパスで用意してきたサイン構造物を組み立てる作業に集中しています。ここまで準備するためにどれだけの労力を要したか計り知れません。私は、この企画運営と一連の作業によって彼らが確かな力を身につけたことを確信しています。



当日の朝、学生たちは、キャンパス内にはサイン構造物や看板、会場となる教室の前には発表内容が分かるように工夫したスケジュール表を設置し、参加者を迎える準備が整いました。彼らはスーツ姿で参加し、これらのサインが人の動きや気持ちにどのような影響を与えるかを観察してメモを取り続けます。「情報デザイン」ではユーザによい体験をもたらすことが目標なので、配置などを検証しながら修正し、フィードバックしていく

姿にそれが表れていました。普通の情報科教員の私にとって、美術系の学部ではない彼らの活動は、高校におけるICT教育・情報デザイン教育の目指すもの的一端として目に映りました。大会の参加者の中には、最近話題になっている「情報デザイン」を知るきっかけになった方も多いと思います。



大会当日のサイン構造物に対して、参加者から「情報科の大会だからこそこのものが見事に実現された」と高い評価を受けたように、コンピュータ教育からICT教育への移行が進んでいることの具体的な事例になりました。小池ゼミの皆様には実行委員一同、心より感謝しております。

3. 大会の概要

大会の内容は、午前中は基調講演、午後は時間を区切って分科会とポスターセッション、そして随時の企業展示からなります。

基調講演には文部科学省初等中等教育参事官齋藤尚樹氏をお招きして、「新しい学習指導要領と情報教育」というテーマでご講演をいただきました。会場は満席となり、参加者が今後の情報教育に期待を持っていることを感じ取ることができました。



分科会は5会場それぞれ5本、合計25本の発表がありました。

この分科会では、テーマに「デザイン」を含む発表が目立ちました。12月22日に案が発表された新学習指導要領の専門教科「情報」の科目名でもある「情報デザイン」の定義・解釈はまだ未確定です。しかし、大学や専門学校の学科・コース名の一部に使われるようになってきていることから、

社会が必要としている分野であることは間違いありません。上級学校で先進的な活動をされている先生方が立ち上げた「情報デザインフォーラム」の研究会には何度か参加させていただいていますが、ISO13407で定められた人間中心設計プロセスの各工程を実現する手法を事例報告で拝聴することができ、よい勉強になっています。

日本学園中学・高校の磯崎喜則先生と横浜デジタルアート専門学校浅野智先生による発表「情報デザイン教育の提案 ～専門学校教育の事例から～」では、人間中心設計プロセスを俯瞰して説明し、特に「ペルソナ／シナリオ法」を取り上げて紹介されていました。これらを総括した「情報デザイン教育」の高校への導入を提案されていましたが、先進的に実践されている事例を伺うと、「情報デザイン」は情報の授業のみならず、高校の様々な科目・学習活動の中で活かされていくと考えられます。様々な研究会やワークショップが展開されていますので、これからも積極的に参加して勉強していきたいと考えています。平成25年度の新学習指導要領実施までに高校のカリキュラムの中にどのように落とし込むことができるかが当面の私の研究テーマになりそうです。

東横学園中学・高校の日下晴比古先生と武蔵工業大学環境情報学部の小池星多准教授による発表「Squeakを使用した教育環境のデザイン」では、アルゴリズム学習の支援のためにSqueakの操作マニュアルやチュートリアルビデオを作成し、それらを活用して授業を展開した実践報告をされていました。小・中学校を含めた新学習指導要領ではプログラミング教育の比重が高くなっていますので、タイムリーな発表でもありました。この発表を伺い、本校では小池ゼミが作成したサイト「Squeakで学ぼう」を参考にして、「情報B」で6回の授業を行いました。生徒は、自分で描いたオブジェクトを操作することでアルゴリズムに興味を持ったようで、毎回の授業を楽しみにしてくれました。執筆時は冬休みの作品制作を課していますので、成果物が楽しみです。アルゴリズム学習の導入のために教育環境をデザインするという発

想とその環境作りも「情報デザイン」の一部と認識しました。

ポスターセッションでは、固定機の教室のため少し見にくかったとの意見もありました。しかし、分科会との時間を調整したこともあって大変盛況な様子で、交流の場としても大成功でした。



ポスターセッションでも「情報デザイン」を取り扱った発表が多くありました。高田真奈未先生（神奈川総合産業高校）は「オブザベーション（観察法）」を取り上げて教育手法を提案されていました。また、武蔵工業大学で情報科教職課程を担当されておられる小池先生は、小池ゼミで行っている情報デザインの教育・研究について紹介していました。このポスターでは、今回の大会のサイン計画の実現までの企画も紹介されており、学生たちは参加者から多くの質問を受けていました。

紙面の都合もありますので、他の発表につきましてはWebサイトをご覧ください。

4. 来年の全国大会

今回の全国大会は、平成21年8月24日（月）に茨城県つくば市にある筑波学院大学を会場として実施されます。現在、茨城県高等学校教育研究会情報部会が津賀宗充先生（県立鉾田第一高校）を中心に計画を進めています。サイン計画は筑波学院大学の学生が担当してくださる運びとなっており、これもまた頼もしい限りです。

今回は北海道から沖縄まで25都道府県からの参加がありましたが、今回はさらに多くの地域からの参加を期待しております。全国の皆様、発表を含めて、どうぞご予定をお願いいたします。

5. 全国大会サイト

- ・ <http://kanto-joho.net/all-japan/>
- ・ <http://www.yc.musashi-tech.ac.jp/~design/nextstage/>